

平城京羅城門発掘調査概要

今回の調査は、大和郡山市教育委員会と当研究所が協同し、昭和47年2月から3月にかけて、平城京羅城門の本体とそれにとりつくると予想される羅城の遺構を明らかにするため実施した。発掘区は佐保川にかかる来生橋西側土手下の金魚池南半部372㎡で、地番は大和郡山市観音寺町114-1 114-3である。

今回の調査は羅城門の調査としては第3次にあたる。第1次調査は奈良市教育委員会により、昭和44年7月～8月にかけて、平城京羅城門東側の遺構をあきらかにするため佐保川左岸堤防下で実施した。多くのトレンチを入れたにもかかわらず、多年にわたる洪水のためか、大部分の遺構は流出していて、ほとんどその跡をとどめていなかった。出土遺物は、奈良時代の瓦破片数点と近世の漆器の壜2点である。第2次調査は大和郡山市教育委員会により、昭和45年3月～4月にかけて、平城京羅城門西側の遺構を明らかにするため佐保川右岸の堤防付近で実施した。検出した遺構は、朱雀大路西側溝と築地・九条大路北側溝と築地・羅城外の濠等である。出土遺物としては、朱雀大路西側溝より多数の、瓦・須恵器、和同開珎2枚・木簡1点（判読不明）等があり、朱雀大路西築地の西側より多数の軒丸・軒平瓦・垂木1本、さらに九条大路北側溝より和同開珎1枚・木片、九条大路北犬走りより多くの瓦等が出土した。

今回第3次の調査で検出した遺構は、羅城門の基壇・築地寄柱穴・側溝・暗渠等である。

羅城門基壇 基壇は大部分が、佐保川河道付替工事により破壊されている。今次検出したのは、基壇の西北辺にあたる。基壇の上面及び周囲は平安時代に削平されており、基壇化粧や雨落溝は検出できなかった。基壇そのものも掘り込み地業を調査した結果、西辺で1.32m 北辺で1.0m 削り取られていることが判明した。現状で基壇の高さは0.6m、掘り込みは0.22mある。基壇の掘り込み地業は最下層に粘土を置き、その上に粘土や礫・砂等を互層に積み、縞状につきかためたものである。

門の礎石や根石の推定位置は今回の発掘区には含まれていない。昭和10年の

来生橋改修の際、佐保川右岸より花崗岩質の礎石が4個(うち1個は唐居敷)出土している。

平城京朱雀大路の幅を築地心々で28丈(約84m)と仮定し、その中軸仮定線と第2・3次の発掘結果により、羅城門の基壇の規模は東西34m、南北20.4m(または22.4m)となる。したがって桁行5間、梁行2間または3間の重層門であると推定される。

築地寄柱穴 築地の基底部は削平されており、明確には検出できなかったが、基壇西面の中央部にとりつく築地の寄柱と推定される穴を検出した。その寄柱穴は2対あり、一方は柱間2.7m、他方は柱間4.2mである。両者の前後関係はわからない。

側溝 側溝は、昭和45年度の調査のとき検出した朱雀大路西側溝の南延長部分にあたり、羅城の下を通過して京の外濠に注ぐものと考えられる。調査区の南端では幅4m(復原値、現状は5m)深さ0.8mあるが、北端ではあふれた流水によって扇形に拡がっている。側溝の底部東寄りに護岸に使用されたと思われる石(約0.3×0.4m)が多数ある。これらの石の下やあいたから、和同開珎か10枚発見された他、奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦・土馬・帯金具・釘等が出土している。遺物の出土状態から考えて、この溝は平安時代まで存続していたものと考えられる。

暗渠 側溝に添って南北に走る幅0.9m、深さ0.4mの溝状遺構がある。羅城造営当初からの暗渠と考えられるが、側溝底より0.3m高く、北から南に向って低くなっている。この溝は木樋の暗渠の掘り方であろう。

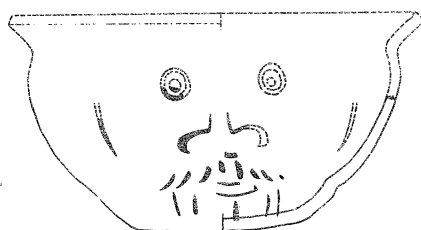
以上3回にわたる羅城門とその付近の発掘調査の結果、羅城門基壇・羅城門西にとりつく築地・朱雀大路の西側溝とその西側築地・九条大路の北側溝とその北側築地・羅城の外濠が明らかとなり、平城京の朱雀大路・九条大路・羅城門・築地(羅城)の配置を統一的にとらえることができるようになった。

遺物は、主として朱雀大路西側溝の南延長部分から出土した。主なものは、瓦・土器・土馬・金属製品・和同開珎などである。

瓦 軒丸瓦は、6133・6284・6285・6304-Lの4種、軒平瓦は6694・6721の2種ある。この他に面戸瓦1点、丹のついている瓦1点がある。

須恵器 坏（高台がつく）・蓋・高坏・壺・鉄鉢等で奈良時代中頃のものである。

土師器 坏・甕・広口壺等で奈良時代後半のものである。広口壺は、10個体分出土しており、口径16-17cm、高さ8-10cmの小形



の壺である。作りは粗雑で、胴部に粘土紐の痕を残し、底は凹凸がいちじるしい。胴部に人面を墨書している例がある（上図）。奈良時代後半のものである。

黒色土器碗 厚手軟質で内外面黒色をしており、内底面に波状の暗文がある。断面三角形の低い高台がつく。平安時代前半のものである。

瓦器碗 比較的薄手硬質で黒銀色をしており、内外面を粗く飽磨きし、外面胴下半に斜行する暗文、内底面に平行する暗文がある。丸い底には低い高台がついている。平安時代中頃のものである。

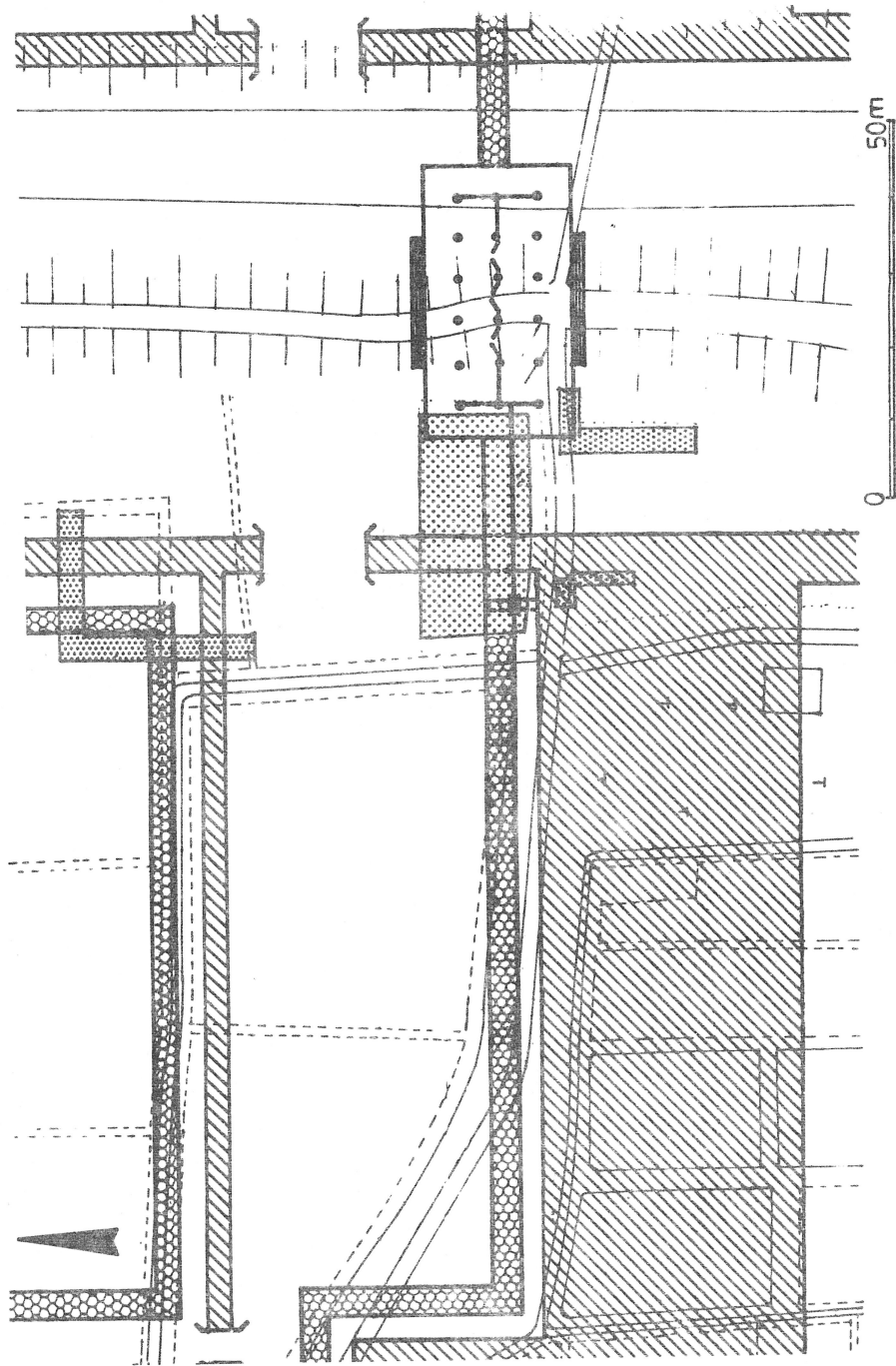
土馬 胴部の残欠で、奈良時代後半のものである。

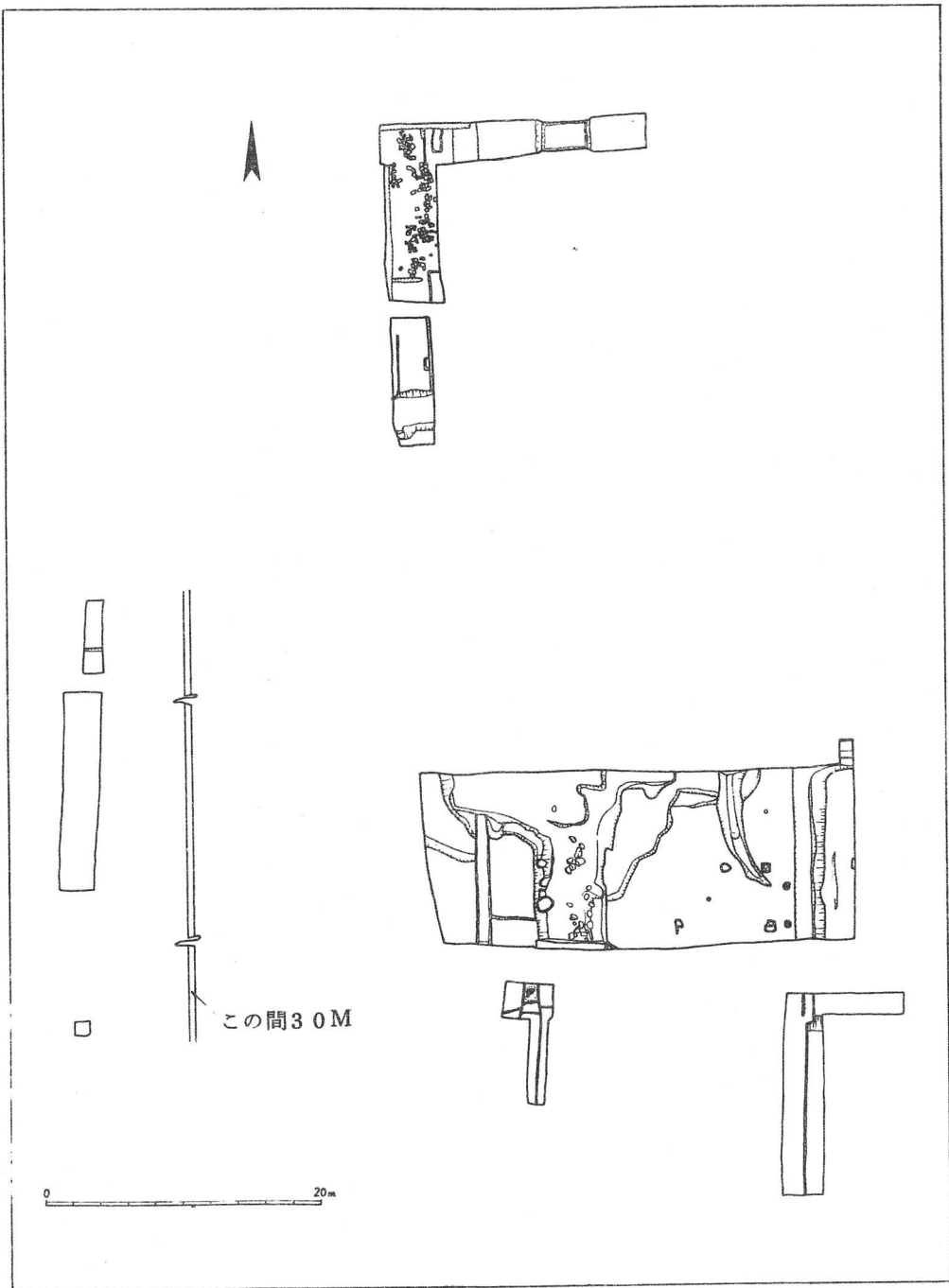
金属製品 帯金具は、帯先につける鉄製の鉞尾で、裏に釘3本を鑄出している。青銅製釘は、長さ7cm、断面四角形をしており頭部は扁平になっている。

羅城門関係史料

和銅7(715)・12・26	新羅使入京 三椅に迎う	統紀
天平19(747)・6・15	羅城門に雨乞いす	統紀
天平勝宝6(754)・4	鑑真入京 安宿王に勅して羅城門に 迎えしむ	元享釈書
宝龜8(777)・4・17	遣唐大使佐伯今毛人羅城門に到り病 と称して留まる	統紀
宝龜10(779)・4・30	唐使入京 京城門外三橋に迎接す	統紀

平城京羅城門付近復原図





平城京羅城門第2次・第3次発掘調査遺構